アジアのなかの日本⑰

あるイスラム指導者の願い

大澤文護｜●毎日新聞客員編集委員（千葉科学大学教授）

「戦いたい。ただ、それだけ」。中東の過激組織「イスラム国」の戦闘員に加わろうとしたとして、警視庁の調べを受けた日本の国立大学生の言い分を聞いて肌が粟立つ思いがした。昨年まで数回にわたってシリアの反体制勢力と行動を共にしたと言う日本人男性の「銃撃戦を無事に潜り抜けると"自信"が生まれた」という感想に至っては、新聞報道を見ただけで怒りが湧いてきた。

政府軍とイスラム武装勢力が30年以上も戦い続けるフィリピン南部・ミンダナオ島中部に、ダトゥ・パグラスという町がある。そこに「武力闘争では平和は来ない。経済開発と教育振興が我々の生きる道」と訴えるイスラム社会の若き指導者がいた。彼の名前は、ダトゥ・イブラヒム・ペンダトゥン・パグラス3世。彼と会ったのは2008年1月。白のTシャツにジーンズのいでたちで、小型自家用機に乗ってミンダナオ島を飛び回る彼の姿は、私が抱いていたイスラム指導者のイメージからは掛け離れていた。

武器も政治も捨て

当時40代だった彼は、物心ついたころから政府軍との戦闘に明け暮れる日常の中にいた。イスラム指導者の家に生まれた男たちは、次々に戦いに加わっては傷つき、死んでいった。やがて政府と、つかの間の和平合意が結ばれた。だが、今度は同じイスラム勢力の内紛で父が死んだ。元々、武装闘争に疑問を感じていた彼は、1988年に地元町長に就任して政府と武装勢力の仲介役になろうと試みた。しかし、戦いは収まらなかった。

やがて彼は武器も政治も捨て、農業ビジネスマンに転身した。米国の資本を誘致し、イスラム教徒が最大の敵と見なすイスラエルの灌漑技術を導入して、故郷の原野約1千60ヘクタールを農地に変え、そこでバナナやパイナップルの果実生産を始めた。故郷から200キロも離れたキリスト教地区にも出かけていって、「戦いの島」を「農業の島」に変えようと訴えた。彼の努力は実り、キリスト教地区にも3千ヘクタールの広大な果実農園が生まれた。

農園や果実加工場で働く人の多くは、元イスラム戦士やその家族だ。私は彼に「なぜ戦いをやめたのか」と聞いた。彼は目を大きく見開いて、こう言った。

「戦いじゃ何も変わらない。家族は亡くなり、町の人は貧困にあえぐだけだ」。そして元戦士たちの姿を見ながら、こうも語った。「みんな戦士だった。山に隠れて戦い、妻は町に出て家族のために日雇いで稼いだ。でも今は違う。家族一緒に1日3食をとり、いつも一緒に暮らせるのだ」。彼の目が、話しながら潤んでくるのを私は見逃さなかった。

戦いは何も生まない

来年は戦後70年。家族一緒に3食を食べ、一緒に語り合う。そんな暮らしを日本人が取り戻したのは、それほど遠い昔ではない。それなのに、家族を置いて戦地に赴いた元イスラム戦士たちの悲しみを理解せず、「ただ戦いたかった」というだけで銃を持とうとした日本の若者がいた。思うような人生が送れず、自分の居場所さえない。その空疎な心で周囲を見渡したとき、彼らの最も身近にあったのは、ネット社会に密かに広まっていたイスラム過激勢力のプロパガンダ（宣伝）だった。彼らは易々と過激派の戦略に乗り、テロと悲しみを世界へ広める片棒を担がされることになった。

戦いは何も生まない。生まれるのは破壊と絶望だけだ――。そう言って、宗教や貧富に関係なく、すべての人々の平和と幸福を願ったパグラス氏は、惜しくも数年前に病気で亡くなった。イスラム指導者にも彼のような人物がいたことを、これまで新聞記事や講演で伝えてきた。いまは教室で、大学生の若者たちに伝えねばならないと思っている。

アジアのなかの日本⑭

「25年後に住みたい日本を作るには」

大澤文護｜●毎日新聞客員編集委員（千葉科学大学教授）

ただ言葉を交わすだけで、自分の視野や考え方の幅が広がる人がいる。私の友人で、世界保健機関（WHO）世界ハンセン病対策プログラムチームリーダー（部長）として世界を駆け巡るスマナ・バルア医師（59歳）は、まさにそんな人物だ。私たち友人は愛情と尊敬を込めて、彼を「バブさん」と呼ぶ。

バブさんの故郷はバングラデシュの貧しい農村だ。12歳のとき、近所の女性が難産で命を失うのを見て医師を志した。1976年、兄が留学していた日本に渡った。そこで見たものは、診断や治療を機械任せにする医療現場だった。十分な電気さえない故郷の村では、そんな医療は通用しない。

バブさんは、アジアを巡った。そして地域医療専門家を養成するフィリピン大学医学部レイテ分校の存在を知り、同校初の外国人学生として入学した。本紙（3月9日号）で「レイテ島の医学生から学んだこと」の見出しを付けて紹介した、あの小さな医学校のことだ。

「男の私が、助産師実習で215人もの赤ちゃんを取り上げました。医療従事者として何をしたらいいのか、何をすべきなのか、すべて地域の人々から学びました」と語るバブさんは、保健師、助産師、看護師の実習を積み重ねる同校独特の「階段カリキュラム」を経て、10年がかりで念願の医師になった。レイテ分校を卒業した後、日本で博士学位を取り、世界中の人々の健康を守るためWHO医務官の道を選んだ。

フィリピン大学医学部レイテ分校で演説するバルア医師（2006年6月撮影）

バブさんがWHO西太平洋地域事務局（マニラ）に勤務していた約10年前、毎日新聞マニラ支局長だった私は、彼の家でカレーを食べながら、地域医療の崩壊が深刻化する日本の現状についてよく話を聞いた。

「日本の医学教育に足りないのは、知識や技術ではありません。人と喜びや苦しみを分かち合う体験です」

「日本では成績の良い人が医師になる。だから医学部に入ってから"自分は何のために医師になるのか"と悩んでしまうのです」

まず、あいさつから

WHOの仕事は世界を駆け巡る激務だ。その合間を縫って、たびたび日本を訪れ、若い学生や医療従事者に、地域医療現場で何をなすべきか語った。バブさんを慕う学生たちはマニラを訪れ、フィリピンの厳しい医療現場を体験した。その若者の中から、アジアやアフリカで、地域医療や公衆衛生の専門家として活躍する人材が生まれている。

2012年、バブさんは、長野県佐久市で農村医療の発展に尽くした若月俊一医師（1910～2006年）の業績を記念して制定された第21回「若月賞」受賞。その受賞記念会の講演タイトルが「25年後に住みたい日本を作るには」だった。

「25年経って、こういう国に暮らしていたいと具体的にお考えになってください。そのために、いま自分に出来ることは、どこでも、子供たちにあいさつをすることかもしれません。その姿を見た周囲の人は"この人、どうかしちゃったのかな"と思うかもしれません。でも、次に会ったとき、その子が"おじさん、こんにちは"と声をかけてくれるかもしれません。親に"あのおじさんは毎朝、おはようと声をかけてくれるんだよ"と話してくれるかもしれません。相手が"おはよう"と答えてくれるかどうか心配する前に、あいさつをする……。25年後はこんな国に住んでいたいという理想を実現するためには、まず、何かに取り組むことが大切です」

バブさんの心配は、医療問題から、人と人とのふれ合いが希薄になった日本人の心の問題にまで広がっている。彼の目に映る2014年の日本社会と日本人はどんな姿なのか。今年も、そろそろ日本にやって来るはずのバブさんに会って、聞いてみたい。